

【『琅』三十六号・あとがき】

お節介な大人二題プラス一

今から半世紀以上も前のこと、筆者の学生時代のことである。よく利用していた大学の図書館で、なぜそんな話になったのか覚えていないが、司書の方と、当時、日本語での翻訳出版が始まったばかりの、米国の著名作家の著作について話す機会があった。この大学の図書館に置いてあるなら読んでみたいのだがという私の問いに、その本が本当に**先生の翻訳なら、読むことは妨げないが、そうではないから勧めない、という主旨の返事が返ってきた。

訳者は超一流の出版社だったので、意外な感じがしたことを覚えていいる。

そもそも、図書館は本を紹介したり貸し出ししたりすることを業務としているわけだから、読ませないというのは、ひどいお節介な話ではないかと、そのときは思った。

後になって、当該翻訳書を読む機会があったが、彼の忠告通りと言ったらいいのか、筆者の文章理解力欠如故と言ったらいいのか、よく理解出来ない文章だった。

あのときの忠告が、どのような根拠に基づいていたのか分からないが、今号の「評壇」の準備をしながら、彼の認識は、あなたが間違っているとは思ってはいませんかと思うようになった。

同じ頃、もう一人のお節介な大人に出会った。

「文学」の授業の夏休みの課題は、「梨花の花」（中野重治）・「暗夜行路」（志賀直哉）・「金閣寺」（三島由紀夫）の三作品を読んで、四百字詰め原稿用紙三十枚にまとめるというものがあった。一般教養の授業だったにも拘わらず、この課題のことを今でも覚えているのも不思議だが、出来上がったレポートを提出に行ったときのことも忘れられない。

家の近くの郵便局の窓口で、宛名に△△先生と書いてある茶封筒を出して送料を尋ねると、相手をしてくれていた局員は、「この封筒は・・・」と言って、手を止めたのである。

この一通のために大型封筒を購入するのも忌々しいと思いで、家にあったあり合わせの紙で自作した茶封筒だったので、確かに表面には、かなり皺がよっていた。そのような封筒で大学の先生にレポートを提出するのはいかにがなもかたしなめられ、そのときは随分と恥ずかしい思いをしたのである。

その忠告のお陰で「文学」の単位を落とさずに済んだということでもないだろうが、大切な「常識」を教えてもらったと思っている。

気が付くと、あの二人の大人のような、気の利いたお節介もできないまま、年だけを重ねてしまった。

本誌前号で、岩波文庫版「恐るべき子供たち」の不自然な訳文について取り上げ、出版社にも雑誌を送ったが、何の反応もなかった。中途半端な取り上げ方がいけなかったのかと反省し、改めて「評壇」として、お節介のし直しをした。空振りに終わることは承知であるが、知った以上、このまま見過ごす訳にもいらないと思ったのである。

（茂治）

（次号原稿締め切り日） 二〇一九年九月末日

『琅』三十六号 二〇一九年四月 発行

編集・発行人 松村 茂治

発行所 252-1143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-119

「琅の会」・TEL (042-277-3159) (27)

印刷所 株式会社ポプルス